

緻密な計画で太平洋—日本海を踏破

太平洋から日本海へ、日本アルプスをはじめとする山々をつないで縦断したい——。そんな夢を、70歳を過ぎてから、しかも単独行で成功させたそのノウハウを聞いた。

佐藤徹也 文 関口保 写真提供

太

平洋の駿河湾から日本海の親不知海岸へ。その間を結ぶ日本アルプスの山並みをすべて縦走したい——。山好きなら一度は想像してみる夢だ。そんな夢を、なんと70歳を超えてから単独行で実現した人がいる。若き日に山に親しんでいたとはいえ、その後、長いブランクがあり、再開したのは50歳を過ぎて、

ときの体力があるわけではないですがね。荷物は6kgまでと決めて、それで実行できる計画を立てたんです。山小屋が充実している山域ではもちろんそれを利用、食事も山小屋で済ます。背負わずとも購入できるものは、極力現地ですぐに入れることにした。これによつて、まずは上高地から日本海の親不知海岸までという長大縦走を72歳で

水平距離483.25km、実歩行日数55日。
急がず、止まらず、前に、前に。

古傷が痛んで歩くことさえ困難になったから。治すには衰えた筋力を復活させるしかない。医者に宣告され、痛む足を引きずるように低山歩きに励んだのがきっかけだった。彼、関口保さんは、いかにして日本アルプスの峰々を歩いたのだろうか。

まず実践したのは装備の軽量化。「リハビリ山行の結果、不自由なく歩けるようになった」とはいつても、若い

18日間で踏破。この成功で、駿河湾から上高地に至る残りのルートをも歩く覚悟ができたという。翌年に挑んだのは南アルプス。南部の畑大吊橋から北部の北沢峠までを、再び積極的な山小屋利用で歩き通すことに成功した。

「チビ太」と「BC」という相棒の登場

北ア、南アという大物をこなした彼が次にめざしたのは、全ルートの端緒、駿河湾から南アへ至るエリアだったが、ここで今までにない問題に直面。マイナー山域ゆえに、そこには山小屋がなかったのだ。ならば、デイハイイクでつな



「天空の山旅」の相棒、ワゴン車とミニバイク（初代と2代目）。車には自作のベッドや調理台を備える



せきぐち・たもつ

1939年、東京生まれ。中学時代から山に没頭。その後ラリー競技や釣りにのめり込んだ後、還暦近くして山に戻る。2016年12月、太平洋から日本海まで稜線を伝いながら旅をした記録『天空の山旅日記』（山と溪谷社）を上梓。おいらく山岳协会会员。



